

松 山 大 学 論 集
第 20 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 0 8 年 4 月 発 行

英米文学鳥類考：ロビンについて

榊 田 隆 宏

英米文学鳥類考：ロビンについて*

梶 田 隆 宏

1

イギリスやアメリカ（合衆国）で「ロビン」と言えば、誰でも知っている身近な野鳥である。しかし、呼び名は同じでも、両者は全く別種の鳥である。というのも、イギリスのロビンは正式には「ヨーロッパコマドリ（European Robin）」と呼ばれ、正真正銘のコマドリ属に属する「全長 15 センチほど」¹⁾の小鳥である；これに対して、アメリカのロビン、つまり「アメリカコマドリ（American Robin）」はツグミ属に属し、「全長約 28 センチ」²⁾と倍近く大きいコマツグミだからである。見た目には、前者がスズメ大の小鳥とすれば、後者はハトほどの大きさの鳥と言えよう。

この両者のロビンの中で、我が国のコマドリ（Japanese Robin）と近縁の鳥が European Robin であり、この日・欧のロビンは色も形も一見よく似ている。「ヨーロッパはアジア大陸と陸続きのため」³⁾「ヨーロッパの鳥と日本の鳥とでは、対応する近似種が多い」⁴⁾が、その良い例として『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』は、「ロビン」と我が国の「コマドリ」⁵⁾を挙げている。北アメリカで現地の人々が親しみを込めて「ロビン、ロビン」と呼ぶ鳥を見て奇異な感じを抱く日本人が多いのは、American Robin は体色の一部（赤胸）を除いて、本邦のコマドリとは似ても似つかぬからである。換言すれば、European Robin にとって、日本のコマドリが血の繋がった親族に当たるとするのなら、American Robin は全くの赤の他人である。

にもかかわらず英・米では、自国のロビンを特別視する点は全く同じであ

る。というのも、この両国で「ロビン」と言えば、数ある野鳥の中でも別格の鳥だからである。それは①「もっとも英国的な（鳥）」⁶⁾、「英国人にとって特別親しまれ、英国の国鳥になっている」⁷⁾や、②「アメリカ合衆国ではもっとも親しまれている鳥の一つ」⁸⁾、「もっともふつうに見かける鳥、アメリカ人が最も親しみを持っている鳥」⁹⁾という言葉を見れば明らかである。

ひるがえって我が国では、コマドリ（駒鳥）は、ウグイス（鶯）、オオルリ（大瑠璃）と共に日本三鳴鳥の一角を成す名鳥として古来有名である。でも、それは野鳥の飼育が許され、盛んでもあった昔のこと、加えて今も昔も一部の野鳥愛好家の間での話であり、スズメのように「ごくありふれた（鳥）」¹⁰⁾とは言えないことも事実である。その証拠に〈robin=コマドリ〉という英文和訳は即答できたとしても、「ではコマドリを漢字で書いて、その由来は？」と問われれば、途端に窮する人も多いのではなからうか。ちなみに、和名のコマドリの語源について定説とは異なる、興味深い説があるので、ここで紹介したい。

ヒンカラカラとさえずる声¹¹⁾が、馬のいななきのように聞こえるのでコマドリ（駒鳥）というのが定説。ただ、鳴き声による命名であることには間違いないけれども、それが何に似ているのかという点については異説がないわけではない。一つは「似_レ走馬之鳴_レ轡」と、馬が走るときの轡^{くつわ}を鳴らす音に似ていることからという『本朝食鑑』『和漢三才図会』の説もある。今一つは私案であるが、各地の方言を見ると、ウマオイドリ（岩手・高知県）、コマオイドリ（高知県）、コマオイトリ（宮城県）、コマヒキ（島根・徳島・愛媛県）、コマヒキドリ（栃木・愛媛県）などというのが全国的で目立っている。それで馬子が馬を追う声にたとえたものとも考えられないか。方言には、馬のいなく声に由来するものは、全く見当たらない。コマは子馬の意で、それが馬一般を指すことばになった¹¹⁾。

2

以上の点を踏まえた上で、①European Robin, American Robin, 本邦のコマドリとは一体どのような鳥なのか；②何故にアメリカ人は、別種の鳥であるコマツグミを敢えて「ロビン」と呼ぶのか；③英・米とは異なり、我が国のコマドリが人口に膾炙していないのは何故か；④ロビンは民間伝承や文芸の世界で如何なる役を演じているのか、等々について考えてみたい。

最初に、問いの①：European Robin, 厳密に言えば、本章で扱うイギリス種のロビンから見てみよう。この鳥について、「鳥の詩人」と言われた英国の博物学者 W. H. ハドソン (William Henry Hudson [1841–1922]) は、「この色鮮やかな小鳥は、人間に寄せる信頼ひとなつと人懐たぐいこさ、その類まれな美しさ、それにナイチンゲールの縁者となるに相応しい大変な歌の名手であるが故に、誰からも好かれている (“this bright little bird is a universal favourite on account of his confidence in and familiarity with man, and his rare beauty, and because, as becomes a cousin of the nightingale, he is a very sweet singer”)¹²⁾」と、また井上義昌氏の『英米風物資料辞典』は、「大陸種のロビンに比べて、イギリス種のロビンの特色は‘open and exceptionally friendly behavior to human beings’にある」¹³⁾と述べている。更に詳しい解説を英国版の『野と森の鳥』で見てみよう。

Everyone has a soft spot for ‘the pious bird with the scarlet breast, Our little English robin,’ to quote Wordsworth’s lines. Its cheeky behaviour and trusting attitude make it a universal favourite. References in poetry and nursery rhyme, not to mention Christmas cards, are innumerable.

The robin, or redbreast, is found all over the country, and is conspicuous at most times of year, especially autumn and winter. The continental variety is rather wilder in its habits, has a paler breast and is an occasional migrant to Britain.

The robin has a bright orange-red forehead, throat and breast, with a pale

grey border. The upper parts are olive-brown, the lower breast and belly grayish-white. Both sexes look alike, but the young lack the orange breast and are spotted.

It is very much a bird of the undergrowth, but can be seen perching anywhere in the open, and darting across lawns in a series of lively hops. Its diet comprises insects, spiders, weed seeds, grain, berries and soft fruit, whilst in winter it will fearlessly approach houses for crumbs. Though friendly to man, it is extremely bold and pugnacious towards other birds, and indeed other robins. It appears to have a quick temper and to enjoy fighting for its own sake. Battles are fought with others of its kind over territories staked out by each bird for itself in late summer.

The robin's song is cheerful and melodious, audible throughout the year, and sometimes at night. The female also joins in the singing. If excessively angered, the robin erupts with a sharp, scolding note or hiss.

It will nest almost anywhere, in bushes or evergreen, in walls, banks or nesting-boxes, even in old boots and kettles. The nest is bulky, of dry grass, leaves and moss, lined with hair, and is always cleverly hidden. Five or six eggs are laid, light blue or white, with fine reddish speckles.¹⁴⁾

(なべての人が特別な愛着を覚える鳥。それが、ワーズワースの謳う「胸赤の神聖な鳥、可愛い我がイギリスのロビン」だ。その小生意気な振る舞いや、人を疑うことを知らない態度を見れば、誰でもロビンが大好きになる。この鳥は詩歌や童歌^{わらべうた}には数知れず登場する。クリスマスカードは言うまでもない。

ロビン、別名「胸赤鳥」は英国全土で見られ、それは四季を問わない。でも、とりわけ目立つのは秋と冬。この英国種のロビンと比べると、大陸種のロビン^{いざさ}は些か野生の習性が抜けず、胸部の赤色も薄い。英国には時として渡って来る。

ロビンの前額部、喉、胸部は^{とうせき}橙赤色で、その境界部は淡い灰色。体の上部は黄茶色で、胸と腹の下部は灰白色。親鳥では雌雄の姿は似ている。だが、ヒナ鳥では胸部の橙色が未だなく、体にはマダラの斑点がある。

ロビンは藪の鳥である。でも、見通しの利く開けた場所なら、どこでも低木に止まっている姿や、ピョンピョンと軽快に飛び跳ねながら芝地を走る姿を目にすることが出来る。その食餌は昆虫、クモ、雑草の種子、穀物、液果類、それに柔らかい果実等である。冬季にはパン屑を求めて、物怖じすることなく人家に近づく。人懐こい鳥だが、他の鳥、とりわけ仲間のロビンに対しては、すこぶる大胆で喧嘩っ早い。気が短く、喧嘩ために喧嘩を楽しんでいるように見える。晩夏にはテリトリーをめぐって争う。

ロビンの鳴き声は快活で美しく、1年中、時には夜でも耳にすることができる。雌も又この囀りに加わる。怒りに狂うと、叱りつけるような甲高い鳴き声、シューシューという激しい歯擦音を発する。ほとんど何処にでも巣を作り、営巣場所は藪や常緑樹から壁、土手、巣箱、更には古長靴やヤカンと多岐に亘る。巣は大きくて分厚く、巢材は乾いた草や葉や苔。内部は毛で内張されていて、常に人目に付かぬよう巧妙に隠されている。卵の数は5～6個。色は薄青か白で、赤みがかった細かい斑点がある。）

要約すれば、イギリス種のロビンは、①別名「胸赤（鳥）」と呼ばれているように、胸部の赤い色が目立つ鳥である。②実に人懐こい野鳥で、1年中国内の至る所でその姿を目にすることが出来る。③鳴き声は「快活で美しく」、四季を通じて聞かれる。④故に、英国では万人に好かれる大の人気者で、詩歌や童謡の世界にも数多く登場する、となろうか。出口保夫氏も『イギリス四季歴（秋冬）』の中で「イギリスの冬の小鳥の中で、人々がいちばん愛着を感じるのは、コマドリであって、胸もとが赤いので、英語で〈レッドブレスト〉ともいう。見た目も、またその鳴き声も、かわいいので誰にも好かれる」¹⁵⁾と述べている。

この絶大な人気の背景には、①「ヨーロッパ大陸では（ロビンは）森の中に生息」¹⁶⁾し、晩秋には南方に去る渡り鳥であるのに対して；②「イギリスでは人家近くの林に多くすみ、人を恐れずに活動する」¹⁷⁾留鳥、つまり「季節的移

動を行わず、一年中、ほぼ一定の地域にすむ鳥。日本ではスズメ・カラス・カワセミ・キジなど¹⁸⁾ という英国固有の事情もあるに違いない。

ジェフリー・チョーサー (Geoffrey Chaucer [1340?–1400]) の『鳥の議会 (The Parliament of Fowles) [執筆 1381–82]』には、「人慣れしたロビン (“The tame ruddok [robin]”)¹⁹⁾ と、アイザック・ウォルトン (Izaak Walton [1593–1683]) の『釣魚大全 (The Compleat Angler, or the Contemplative Man's Recreation) [1653]』には、「生きているときも死んでからも人間を愛し続ける正直者のコマドリ²⁰⁾ (“the honest Robin that loves mankind both alive and dead”)²¹⁾」と、ギルバート・ホワイト (Gilbert White [1720–93]) の『セルボーンの博物誌 (The Natural History of Selbourne) [1789]』には、「(ロビンとミソサザイは) 人家へよく来る。冬には下屋へよく来る²²⁾ (“These [red-breasts and wrens] frequent houses ; and haunt out-buildings in the winter.”)²³⁾」とあり、ロビンが人慣れした愛すべき野鳥であることを示している。と見てきたところで、次に、問いの②：何故にアメリカ人はコマツグミをロビンと呼ぶのか、について考えてみたい。

3

英国で「人間に最も愛される鳥」、それがロビンである。この「もっとも英国的な鳥」の特徴は何よりも《胸赤》にある。「胸赤のロビン (robin redbreast)」と呼ばれる所以である。この胸赤鳥が英国の「国鳥」、つまり国を象徴する鳥である。したがって、英国人、とりわけ海外に移住した人たちにとって、ロビンのような胸の赤い鳥と言えば、《母国イギリス》というイメージ・シンボルに直結する。だから、「世界各地へ移住した英国人は、ロビンに似た鳥を見つけると、その名を付けて故郷を偲んだ²⁴⁾」のであり、「胸の赤い鳥を発見すると robin の名をつけた²⁵⁾」のである。

この結果、アメリカでは胸赤鳥 (“orange-breasted”)²⁶⁾ のコマツグミが「ロビン (American Robin)」と呼ばれるようになった²⁷⁾ というのが定説である。研

究社の『英語歳時記（春）』も「アメリカ産の robin (*Turdus migratorius*) はツグミの一種で、大きさは 30 センチもあるが、腹がレンガ色をしているため、英国からの移住民により robin と呼ばれている」²⁸⁾ と述べている。ちなみに、このロビンは『大きな森の小さな家 (*Little House in the Big Woods*) [1932]』の作者で、我が国でも有名なローラ・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder [1867–1957]) の生まれ故郷、ウィスコンシン州を初め、コネティカット州、ミシガン州の州鳥 (state bird) でもある。

このロビンが北アメリカで「もっともふつうに見かける鳥、アメリカ人が最も親しみを持っている鳥」となった今一つの理由は、彼らが文明社会に順応して、森の鳥から町中の鳥へと住処も習性も変えたからである。『朝日＝ラールス世界動物百科（鳥類）』はコマツグミを解説して、次のように述べている。短いので全文引用する。

コマツグミは、北アメリカにいるツグミ属のうちで代表的な種である。背中は濃い灰褐色、腹は赤茶色、のどには斑紋があり、目のまわりは白い斑がある。大きさはクロウタドリほどで、習性や鳴き声などもクロウタドリに似ている。

今では、すっかり文明社会に順応してしまって、アメリカ合衆国ではもっとも親しまれている鳥のひとつとなった。現在では、人里離れた地方よりも、町中や郊外のほうが好きなようだ。そこで人間に狩られる心配はなくなったが、今度は DDT による薬害が問題になっている。事実、DDT を多量に使う地区では、コマツグミの姿は著しく減ってしまっている²⁹⁾。

4

では第3に、問いの③：英・米と異なり、我が国のコマドリが人口に膾炙していないのは何故か、について見てみよう。本邦のコマドリについて、平凡社の『世界大百科事典』は次のように解説している。

スズメ目ヒタキ科の鳥。英名ロビン robin という鳥をしばしばコマドリと訳すが、近縁ではあるがまったくの別種である。全長約 14cm、いわゆる小型ツグミ類で、体上面と胸は赤褐色、腹は白っぽい。雌のほうが雄よりも淡色。日本だけで繁殖し、北海道～九州のほか、利尻島、礼文島、南千島、伊豆諸島、屋久島などの島々にも生息する。秋・冬季、南部の一部のものを除いては南方の温暖な地方へ渡去する。本土および屋久島ではおもに標高 1,000m 以上の山地に生息するが、伊豆諸島や利尻島、礼文島では海岸付近から生息している。よく発達した森林にすみ、地表付近を移動しながら昆虫をとって食べる。つがいで一定範囲のテリトリーを占有して繁殖する。テリトリーの防衛にあたっては、雄はヒンカラカラカラーという美しい声でさえずったり、隣接個体と実際のとつきみ合いをしたりする。こうしたさえずりや争いの際、雄は胸をそらしたり、尾をたてたり扇形におし下げたりして、その赤褐色部分を誇示する。わん形の巣を崖地のくぼみや木の根もとなどにつくる。伊豆諸島で繁殖するものは、地上数メートルのところにある樹洞も利用する。産卵期は5～7月ころで、美しい青緑色の卵を3～5個産む。抱卵は雌だけが行い、育雛は雄も手伝う。古くから飼鳥として珍重され、飼育家の間ではウグイス、オオルリとともに日本の三鳴鳥に入れられている³⁰⁾

つまり、「秋・冬季……南方の温暖な地方へ渡去する」、「標高 1,000 メートル以上の高い山の、クマザサなどが茂る溪谷や斜面に住む」³¹⁾という言葉が示すように、日本のコマドリは「夏鳥として九州以北に渡来する」渡り鳥である。しかも本邦に居る間は、「いつも深いやぶの中にいるので、姿を見ることはむずかしい」³²⁾ 鳥、つまり深山幽谷の鳴鳥なのである。それは、この鳥の姿や声に触れた次の俳句からも窺い知ることができる。

① 駒鳥や崖をしたたる露のいろ 加藤楸邨³³⁾

② 駒鳥こま鳴くや月照山は雲の上 大竹孤悠³⁴⁾

このように英・米のロビンとは異なり、我が国のコマドリは人界や俗界とは全く無縁の鳥であり、人里から遠く離れた仙境に住む森の妖精にして歌姫であると言えよう。したがって本邦では、喫茶店のように憩いと癒しの空間でもある飲食店の店名に、時として「コマドリ」が用いられているのは故なきことではないのである。ちなみに、日本ではキジが国鳥（1947年指定）³⁵⁾である。では第4に、問いの④：民間伝承や文芸の世界に登場するロビンの姿について見てみよう。

5

最初に、民間伝承から。ピーター・グッドフェロー（Peter Goodfellow）は、「（ロビンは、ミソサザイやツバメと共に）他のどの鳥にもまして……不思議な力や宗教的迷信を持っています」³⁶⁾と述べている。具体的に言えば、ロビンの持つ「不思議な力」とは「死んだ人を見送る力」³⁷⁾のことである。この点に関して、①『ブルーワー英語故事成語大辞典』は「コマドリは死者に葉をかぶせておおう」³⁸⁾（“the robin covers the dead with leaves”）³⁹⁾；②アト・ド・フリース（Ad de Vries [1924–81]）の『イメージ・シンボル事典』は「森で迷って死んだ子供達を埋葬した（“it buried the children lost in the wood”）⁴⁰⁾」り、また「死体に覆いをかけて、かたわらで嘆き悲しむ」⁴¹⁾（“it covers any dead body of a man and mourns beside him”）⁴²⁾と述べた上で、一例として英国の劇作家ジョン・ウェブスター（John Webster [1580?–1625]）の『白魔（White Devil）[1609–12]』の中の言葉：「（ロビンとミソサザイは）友もなく埋葬されない亡骸^{なきがら}を葉や花で埋めてやる」⁴³⁾（“[the robin and the wren] with leaves and flowers do cover/The friendless bodies of unburied men.”）⁴⁴⁾」を挙げている。W. H. ハドソンの言葉で換言するなら、「冬になると人間のもとへパン屑をもらいにき、人間への愛着が強くて、林や無人の地で倒れた人がいると、その死体の上に木の

葉をかぶせるという赤胸のロビン⁴⁵⁾ (“robin redbreast who in winter comes to us for crumbs and has so great an affection for our kind that in woods and desert places he will strew leaves over the friendless bodies of unburied men”)⁴⁶⁾」となろうか。

次に、ロビンに関する「宗教的迷信」とは、〈何故にこの鳥の胸が、あのように赤くなったのか〉という疑問と、その解答に関するものである。具体的に紹介すると、①「主イエス・キリストがカルバリ (Calvary) に向かう途中、コマドリが主のイバラの冠からトゲを抜いたところ、その傷口から出た血がコマドリにたれてその胸を赤く染めた⁴⁷⁾ (“The tradition is that when Christ was on his way to Calvary, a robin picked a thorn out of his crown, and the blood which issued from the wound falling on the bird dyed its breast with red.”)⁴⁸⁾」(『ブルーワー英語故事成語大辞典』)；②「キリストにささったいばらを抜き取ろうとして、また一説にはキリストの体を木の葉でおおったときに、血にまみれた⁴⁹⁾ (“it tried to pull Christ’s thorns out, or was smeared when it covered Him with leaves”)⁵⁰⁾」(フリース『イメージ・シンボル事典』)；③「コマドリはキリストのイバラの冠からイバラを引き抜こうとして胸が赤くなった。主の血が一滴コマドリにしたたって、胸の羽毛を赤く染めた⁵¹⁾」(日本民話の会・外国民話研究会編訳『世界の鳥の民話』)等々である。その結果、心を動かされたキリストがロビンを祝福して、「どこへでもお前の行くところ幸せと喜びがあるように……これからは、神の小鳥、胸赤のコマドリと呼ばれ、幸福のメッセージの運び手となろう⁵²⁾」と言われたという。

以上見たように、ロビンは宗教的世界と繋がる神聖な「神の小鳥」である。と同時に「人間への愛着が強い」人懐こさの故に、「信用、信頼」⁵³⁾を象徴する鳥でもある。だからこそ、英国では古来「コマドリを殺したり傷つけたりすると大きな不運にみまわれる⁵⁴⁾ (“it is extremely unlucky to kill or harm one”)⁵⁵⁾」、と言われてきたのである。この点に関して、W. H. ハドソンは「巣を取ることにかけては最も無情な村の腕白坊主でさえ、ロビンにだけは手をつけない。ロビンの巣を害すると悪いことがおこるとか、手が萎^なえると言われて

いるからだ⁵⁶⁾ (“even the most thorough-paced nest-takers among the village children are accustomed to spare the robin, because as they say something bad will happen to them, or their hand will wither up, if they harry its nest.”⁵⁷⁾], と述べている。この言葉を裏付けるものとして、加藤憲一氏の『英文学動物話』からエッセックス州とスコットランドに伝わる民間伝承として次の二つを紹介しておきたい。

The robin and (*sic*) the redbreast,
The martin and the swallow,
If ye touch one of their eggs,
Bad luck will sure to follow.

(コマドリやツバメの卵一つにでも触れるなら、かならずたたりに見舞われる) といい、また、スコットランドでも、

The robin and the lintie
The raverrock and the wren,
Them that herries their nest
Will never thrive again.

(コマドリにベニスズメ、
ヒバリにミソサザイ、
その巣をあらす者たちは
ふたたび栄えることはない)

といい、一般に、コマドリを殺した手は、一生、ふるえが止まらないという迷信もあります⁵⁸⁾。

6

では次に、文芸に登場するロビンについて見てみよう。最初に、シェイクスピア (William Shakespeare [1564–1616]) の作品から。登場場面は2カ所：『シンベリン』（4幕2場）と『ヴェローナの二紳士』（2幕1場）である。『シ

ンベリン』から見てみよう。アーヴィラガスがフィディーリの死を嘆いて言う。

Arviragus

With fairest flowers
 Whilst summer lasts and I live here, Fidele,
 I'll sweeten thy sad grave : thou shalt not lack
 The flower that's like thy face, pale primrose, nor
 The azured harebell, like thy veins, no, nor
 The leaf of eglantine, whom not to slander,
 Out-sweeten'd not thy breath : the ruddock [robin] would,
 With charitable bill, — O bill, sore-shaming
 Those rich-left heirs that let their fathers lie
 Without a monument ! — bring thee all this ;
 Yea, and furr'd moss besides, when flowers are none,
 To winter-ground thy corse.⁵⁹⁾

アーヴィラガス

「夏が続くかぎり、そしておれがここに住んでいるかぎり、フィディーリよ、おまえの墓をもっとも美しい花で飾ってやるぞ、おまえの顔に似た花でな。色淡い桜草も、おまえの静脈のように青い筋のある釣り鐘草も、そう、それに野バラも絶やさなからな。バラには悪いが、その香りもおまえの息のかぐわしさにはかなわない。そういう花を、駒鳥がそのやさしいくちばしで——親の恩を忘れて墓石も建てぬ子供たちを恥じ入らせるというそのくちばしで——おまえのところにこそおぼだろう、それに、毛皮のような苔もだ。花のない冬になれば、冷たい地面におまえの亡骸は——」⁶⁰⁾

ここに、既に見たロビンにまつわる迷信、つまり「死んだ人を見送る」「不思議な力」を容易に見て取ることが出来る。では次に、『ヴェローナの二紳士』を見てみよう。ヴァレンティンとその小姓スピードとの対話である。

VALENTINE

Why, how know you that I am in love ?

SPEED

Marry, by these special marks : first, you have
learned, like Sir Proteus, to wreath your arms,
like a malecontent ; to relish a love-song, like a
robin-redbreast

「ヴァレンタイン

おれが恋をしていると、どうしてわかった？

スピード

そりゃあ、特別な兆候が出ましたからね。第一に、
旦那さまは……駒鳥のように恋の歌を口ずさむようになった」⁶¹⁾

ここで、雄鳥が「恋の歌 (love-song)」を口ずさむのは「繁殖期」で、その一大目的は「求愛」⁶²⁾つまり「雌をひきつけてつがいを形成する」⁶³⁾ためである、と学者は言う。だとすると、恋するヴァレンタインをロビンに喩えるシェイクスピアの力量には改めて舌を巻かざるを得ない。というのも、英国種であろうと日本種であろうと、ロビンは洋の東西で“love-song”の名手として共通している唯一の鳥、つまり国際的な鳴鳥だからである。それは、①「日本の三鳴鳥＝ウグイス、コマドリ、オオルリ」；②「ヨーロッパの三鳴鳥＝ナイチンゲール、クロウタドリ、ロビン」⁶⁴⁾という東西の鳴鳥リストを見れば明らかである。

ちなみに、ロビンの恋歌について、『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』は次のように述べている：「ロビンのさえずりは、みごとである……その鳴き声は、一連の短いさえずりから始まり、次第に調子を高めながらこれを繰り返して、ついにはとても鋭い一連のふるえ音を響かせる。」⁶⁵⁾

7

では次に、英詩に登場するロビンを取り上げてみたい。最初に、英国版『野と森の鳥』の中で一部引用されていたワーズワース（William Wordsworth [1770-1850]）の詩について見てみよう。この詩の題名は「蝶々を追いかけるロビン（‘The Redbreast chasing the Butterfly’）[1802]」で、その全文を紹介すれば以下の通りである。

ART thou the bird whom Man loves best,
The pious bird with the scarlet breast,
Our little English Robin ;
The bird that comes about our doors
When Autumn-winds are sobbing ?
Art thou the Peter of Norway Boors ?
Their Thomas in Finland,
And Russia far inland ?
The bird, that by some name or other
All men who know thee call their brother,
The darling of children and men ?
Could Father Adam open his eyes
And see this sight beneath the skies,
He'd wish to close them again.
— If the Butterfly knew but his friend,
Hither his flight he would bend ;
And find his way to me,
Under the branches of the tree :
In and out, he darts about ;
Can this be the bird, to man so good,
That, after their bewildering,
Covered with leaves the little children,

So painfully in the wood ?
What ailed thee, Robin, that thou could'st pursue
A beautiful creature,
That is gentle by nature ?
Beneath the summer sky
From flower to flower let him fly ;
'Tis all that he wishes to do.
The cheerer Thou of our in-door sadness,
He is the friend of our summer gladness :
What hinders, then, that ye should be
Playmates in the sunny weather,
And fly about in the air together !
His beautiful wings in crimson are drest,
A crimson as bright as thine own :
Would'st thou be happy in thy nest,
O pious Bird ! whom man loves best,
Love him, or leave him alone !⁶⁶⁾
(汝が人間に最も愛される, 胸赤の神聖な鳥,
可愛い我がイギリスのロビンなのか。
家の戸口にやって来る鳥だ,
秋風がむせび泣くように吹いている時には。
汝は百姓たちにとって, ノールウエーではペテロ,
フィンランドと遙か内陸のロシアでは
トマスなのか?
汝を知る人は皆色んな名前をつけて,
子供や大人たちに大の人気の
我が兄弟と呼ぶ鳥なのか?
父祖のアダムが^{まなこ}眼を開けて
天が下のこの光景を目にすることが出来るなら,

開けた眼をまた閉じたいと願うだろう。
——もし蝶々が自分の友だちだと知りさえすれば、
此方に向かってヒラヒラヒラと舞いながら
木々の枝々縫い分けて、
私の元に来てくれように。
でも、見えつ隠れつ蝶々は逃げる。
これが本に、人にはいと優しくて、
森の中で行き倒れた子供を見つけると
骨身惜しまず木の葉で覆うという
あの善良な鳥なのか？
ロビンよ、どこか具合でも悪いのか？
心優しく姿も美しい蝶々を
追いかけることが出来るなんて。
蝶々には夏の空の下で
花から花へと好きなように回らせておあげ。
蝶々の願いは只それだけなのだ。
汝は我らが屋内の悲しみを慰むるもの、
蝶々は我らが夏の喜びの友。
ならば何故に汝らは夏の日の中で
遊び友だちとなって、
共に空中を飛び回ることが出来ぬのか？
蝶々の美しい羽根の色は深紅
汝と同じ色鮮やかな深紅だ。
汝は巣の中で幸せになれように
人に一番愛される神聖な鳥よ！
蝶々を愛しておあげ、さもなくばそっとしておやり！)

では次に、ジョン・リリー (John Lyly [1554? - 1606]) の「春の歓迎 (‘Spring’s Welcome’) [1584]」を見てみよう。

What bird so sings, yet so does wail ?

O ’tis the ravished nightingale.

“Jug, jug, jug, jug, tereu,” she cries,

And still her woes at midnight rise.

Brave prick-song ! Who is’t now we hear ?

None but the lark so shrill and clear ;

Now at heaven’s gate she claps her wings,

The morn not waking till she sings,

Hark, hark, with what a pretty throat

Poor robin redbreast tunes his notes !

Hark ! how the jolly cuckoos sing

“Cuckoo,” to welcome in the spring !

“Cuckoo,” to welcome in the spring !⁽⁶⁷⁾

^{なにどり}「何鳥があんなに歌うのか、だが又あんなに嘆くのか、

あゝ、あれは夢中のナイチンゲール。

ジャグ、ジャグ、ジャグ、ジャグ、テルウ！ と泣くよ、

そしていつでも夜中に悲しむ。

耳をそばだつ見事な調べ！ 今聞こえるのは何だろう。

雲雀よ、あれは高くも朗らか、

今日の門にて羽ばたくよ、

その歌うまで朝は目覚めぬ。

聞け、聞け、何と綺麗な喉で、

可憐な駒鳥の歌うかを！

聞けよ、陽気な郭公が^g

クッカー！と鳴いて春を迎うかを！

クッカー！と鳴いて春を迎うかを！⁽⁶⁸⁾

では第3に、ロバート・ヘリック (Robert Herrick [1591-1674]) の「胸赤のロビンに寄せて ('To Robin Redbreast')」を見てみる。

Laid out for dead, let thy last kindness be
 With leaves and moss-work for to cover me :
 And while the wood-nymphs my cold corpse inter,
 Sing thou my dirge, sweet-warbling Chorister !
 For Epitaph, in Foliage, next write this :
*Here, here the Tomb of Robin Herrick is.*⁶⁹⁾

「死者として召し出されなば、汝が最後の親切に、
 木の葉と苔のかたまりとをもて、わが身を掩いかくせよ。
 森の妖精が、わが冷たき屍^{ひま}を埋むる間は、
 汝が挽歌を歌えかし、うましく囀る歌い手よ。
 碑銘として傍らの葉にかく記せ ——
 ここにロビン・ヘリックの墓あり、と。』⁷⁰⁾

この英詩について、川和高斌氏は次のように解説している：「身寄りのない老詩人が淋しく庭を眺めているとき、たまたまそこを訪れた Robin に言寄せて——つまり、頼んで、『わたしが死んだら木の葉や苔で私の屍体を掩いかくし、森の妖精がわたしの屍体を埋めている間、挽歌を歌ってくれ、それから木の葉に、自分の名 Robert の指小辞である（多分は、お前のやさしい名にもちなんで）Robin を名として墓碑銘を書いてくれ』、と言っている情景が想像される」⁷¹⁾ この解説もまた詩の内容そのものも、既に見た①「人間への愛着が強くて……その死体の上に木の葉をかぶせるという赤胸のロビン」にまつわる民間伝承；②「ロビン＝ヨーロッパの三鳴鳥に入る歌姫」という評価を踏まえているのは言うまでもあるまい。では第4に、ジョン・クレア (John Clare [1793-1864]) の「The Robin」を見てみよう。

Now the snow hides the ground, little birds leave the wood,
 And fly to the cottage to beg for their food ;
 While the robin, domestic, more tame than the rest,
 With its wings drooping down, and rough feathers undressed,
 Comes close to our windows, as much as to say,
 'I would venture in, if I could find a way :
 I'm starv'd, and I want to get out of the cold ;
 Oh ! make me a passage, and think me not bold.'

'thou shalt be free

To perch on my finger and sit on my knee :
 Thou shalt eat of the crumbles of bread to thy fill,
 And have leisure to clean both thy feathers and bill.
 Then come, little robin !

「今や地の面^もをおおい、小鳥たちは森をでて
 食物をもらいに田舎家^{いなかや}の方へ飛んでゆく。

そのころ、馴れていて他の小鳥よりもっと人なつっこいコマドリは
 翼をだらりと下げ、荒らけた羽をつくろいもせず、
 われらの家の窓辺にやって来る、こんなことを言うように
 《入り口があったら、わたしは何とかして入りたい。

わたしは空腹だ。それに寒さからのがれたい。

おお！ 入らせてください。そして私が厚かましいと思わないで下さい。》

'わたしの指へ

止まるのも、膝^{ひざ}へのるのも勝手にしていいよ。

お前が腹一杯になるまでパン屑をたべさせよう、

それから、羽^{くちばし}や嘴^{くちばし}をきれいにする暇^{ひま}を与えよう。

だから、おいでよ、ちっちゃいコマドリさん！』⁷²⁾

では第5に、ウィリアム・ブレイク (William Blake [1757-1827]) の『無
 垢の歌』の「幸福な花 ('The Happy Blossom')」を見てみよう。

Pretty, pretty robin !

Under leaves so green

A happy blossom

Hears you sobbing, sobbing,

Pretty, pretty robin,

Near my bosom.⁷³⁾

「かわいい　かわいい駒鳥よ！

目にしみるほどの緑の葉の下で

しあわせな花が一つ

聞いている　おまえが啜り泣き　啜り泣くのを

かわいい　かわいい駒鳥よ

わたしの胸近く」⁷⁴⁾

では第6に、美の詩人ジョン・キーツ（John Keats [1795－1821]）の「秋に寄せて（‘To Autumn’）[1819]」から第3連を見てみよう。

Where are the songs of Spring ? Ay, where are they ?

Think not of them, thou hast thy music too, ——

While barred clouds bloom the soft-dying day,

And touch the stubble-plains with rosy hue ;

Then in a wailful choir the small gnats mourn

Among the river shallows, borne aloft

Or sinking as the light wind lives or dies ;

And full-grown lambs loud bleat from hilly bourn ;

Hedge-cricket sing ; and now with treble soft

The redbreast whistles from a garden-croft ;

And gathering swallows twitter in the skies.⁷⁵⁾

「春の歌何処いずこにありや、あゝ何処いずこにありや、

其なれを考えるなかれ、汝なもまた汝が音楽を有つなり、——

棚曳ける雲穏やかに死にゆく日を柔らかく色づけ、
薔薇色もて切株の野を彩る時、
その時嘆く合唱隊をなして小さき蚊の群れは
川楊の枝のあたりに泣き悲しみ、軽き風
吹き来たり、吹き止むにつれてその声高まり沈む。
又よく育ちし仔羊は彼方の丘より声高く鳴き、
生垣の蟋蟀こおろぎは歌い、又今や三倍の柔らかさをもて
駒鳥は垣めぐらせし菜園に鳴く。
又群がる燕等は空中にありて囀るなり。』⁷⁶⁾

8

以上で英国の詩の紹介を終わり、アメリカの詩についても少し触れておきたい。というのも、America Robin の命名の由来や、この鳥が「アメリカの風土と生活に欠かせぬ春告げ鳥」⁷⁷⁾であることを思う時、ロビンはこの国の詩に於ても重要な役割を果たしていると思われるからである。ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman [1819-92]) の『草の葉』の「秋の小川 (‘Autumn Rivulets’)」, 「歌ってくれ、ライラックの季節のために (‘Warble for Lilac-Time’)」には「(カエデの森の中では) 目元の涼しい、胸赤鳥のロビンがピョンピョン飛び跳ねながら、／日の出と夕暮れには明るい調子の美声で鳴き、／またリンゴの果樹園では木々の間を飛び回って、連れ合いの巣を作る (“The robin where he hops, bright-eyed, brown-breasted, / With musical clear call at sunrise, and again at sunset, / Or flitting among the trees of the apple-orchard, building the nest of his mate”)⁷⁸⁾」という詩句が見られる。しかし、ここでは今一人の偉大なアメリカ詩人、エミリー・ディキンソン (Emily Dickinson [1830-86]) の詩を紹介したい。というのも、彼女にはロビンについて言及した詩が数十首 (33 首) もあるからである。

(詩番 182)

If I shouldn't be alive
When the Robins come,
Give the one in Red Cravat,
A Memorial crumb.

If I couldn't thank you,
Being fast asleep,
You will know I'm trying
With my Granite lip !⁷⁹⁾

「わたしがもう生きていなかったら
駒鳥たちがやって来た時——
やってよね、赤いネクタイの子に、
形見のパン屑を。

深い眠りにおちいって、
わたしがありがとうをいえなくっても、
分かるわね、いおうとしているんだと
御影石の唇で！」⁸⁰⁾

(詩番 634)

You'll know Her—by Her Foot—
The smallest Gamboge Hand
With Fingers—where the Toes should be—
Would more affront the Sand—

Than this Quaint Creature's Boot—
Adjusted by a Stem—
Without a Button—I could vouch—

Unto a Velvet Limb—

You'll know Her—by Her Vest—

Tight fitting—Orange—Brown—

Inside a Jacket duller—

She wore when she was born—

Her Cap is small—and snug—

Constructed for the Winds—

She'd pass for Barehead—short way off—

But as She Closer stands—

So finer 'tis than Wool—

You cannot feel the Seam—

Nor is it Clasped unto of Band—

Nor held upon—of Brim—

You'll know Her—by Her Voice—

At first—a doubtful Tone—

A sweet endeavor—but as March

To April—hurries on—

She squanders on your Ear

Such Arguments of Pearl—

You beg the Robin in your Brain

To keep the other—still—

「あなたは彼女の足で彼女だと分かるでしょう。足指があるはずのところに指がついた、小さなくちなし色の手は、砂地など平気なのです。／一本の棒で柔らかな足にはめこんだ、ボタンもない靴、この奇妙な動物の靴よりずっとたしかです。／あなたは彼女のチョッキで彼女と分かるでしょう。色のしぶい上着の下にきっちり着込んだ、オレンジがかった茶色の

チョッキを彼女は生まれた時から着ています。／彼女の帽子は小さく、風にもたえるように作られ、ぴったり頭にあっている。ちょっと遠くからは、何もかぶっていないように見えますが、近くでよく見ると、／ウールより細かい織物の帽子です。継ぎ目もなく、バンドなどでも止められてなく、つばもついていない。／あなたは彼女の声で彼女と分かるでしょう。初めはおずおずした調子で、優しく努力していますが、3月が4月へと急ぐにつれ、彼女はあなたの耳に、真珠のようなおしゃべりを、惜しみなく注ぎかけます。あなたが心の中で、もう少し静かにとたのむほど。」^[81]

(詩番 828)

The robin is the One
That interrupts the Morn
With hurried—few—express Reports
When March is scarcely on—

The robin is the One
That overflows the Noon
With her cherubic quantity—
An April but begun—

The robin is the One
That speechless from her Nest
Submits that Home—and Certainty
And Sanctity, are best.

「ロビンは、3月がくるかこないかの頃、あわてたような2、3のニュース速報で朝を中断するもの。／ロビンは、4月が始まったばかりの頃、無邪気になつぷりと、真昼を歌でいっぱいにするもの。／ロビンは、その巢からただ黙って、家庭、確実性、そして清浄が、最高であると告げるもの。」^[82]

(詩番 919)

If I can stop one heart from breaking,

I shall not live in vain :

If I can ease one life the aching,

Or cool one pain,

Or help one fainting robin

Unto his nest again,

I shall not live in Vain.

「もしも一つの心を悲しみから救ってあげられたなら

わたしの一生はむだにならないでしょう

もしも一つの^{いのち}生命の痛みをやわらげられれば――一つの苦痛^{しず}を鎮められれば――

弱った一羽のコマドリを

もとの巣へ戻してやれたなら――

わたしの一生はむだにならないでしょう」⁸³⁾

以上のごとく、ロビンは英・米、とりわけ英国では「人間に最も愛される鳥」であり、それはこの旧大国の児童文学の世界にも色濃く反映されている。では第3に、ロビンと英国児童文学について見てみよう。

9

ロビンはイギリスでは老若男女を問わず万人に愛される大の人気者である。故に、この国の児童文学に登場するロビンは、いつも子供の身方であり、また心の友である。最初に、C. S. ルイス (Clive Staples Lewis [1898―1963]) の「ナルニア物語」：『ライオンと魔女と衣装箆笥 (The Lion, the Witch and the Wardrobe) [1950]』から一例を挙げたい。森の中で苦境に陥った子供たちに救いの手を差し伸べるロビン、その姿を形容して著者は言う：「これほどまっ赤な胸と、訴えかけるようなきれいな目をもった小鳥は、だれも見たことがな

いでしょう⁸⁴⁾ (“You couldn’t have found a robin with a redder chest or a brighter eye.”⁸⁵⁾)。そして、子供の一人に「僕が読んだお話には、どれにもいい鳥として出てくるよ。コマドリが悪い者のほうについているはずがないと思うよ⁸⁶⁾ (“They’re good birds in all the stories I’ve ever read. I’m sure a robin wouldn’t be on the wrong side.”⁸⁷⁾)」と言わせている。ロビンの胸赤がキリストの血につながる「神の小鳥」であることは既に見た。

次に、B. ポッター (Beatrix Potter [1866–1943]) の『ピーターラビットのお話 (*The Tale of Peter Rabbit*) [1900]』も、ロビンを抜きにしては語れまい。というのも「コマドリ Robin は、ピーターラビットのおはなしの中で最も重要な脇役⁸⁸⁾」を務めているからである。その理由として益田朋幸氏は、猪熊葉子氏の説：「コマドリは愛惜する幼年時代をポッターに回想させるきっかけを与える鳥であり、孤独に耐えるポッターの心の友であった」を紹介した後で、次のように述べている。

しかしここでもわたしが付け加えたいと思うのは、キリスト受難に関わる意味である……キリストが重い十字架をかついでゴルゴタの丘に引きたてられてゆく途中、茨の冠のトゲをついばんだため、コマドリの胸は赤くなった、と伝説は言う。つまりコマドリは、キリスト受難の道行きの証人なのだ。かつてキリストの十字架上の死を看取ったように、コマドリはピーターにつきそい、いたずらこうさぎの「受難」を心配げに見守る⁸⁹⁾

では第4に、伝承童謡 (nursery rhymes) に登場するロビンについて見てみよう。最初に、「風よ、吹け、吹け (‘Blow, Wind, Blow’)」の第2連を紹介したい。

The north wind doth blow,
And we shall have snow,

And what will poor robin do then ?

Poor thing.

He'll sit in a barn,

And keep himself warm,

And hide his head under his wing.

Poor thing.⁹⁰⁾

「きたかぜびゅうびゅう ふいてます

もうすぐゆきが ふってくる

そしたらこまどり どうするの？

かわいそうな こまどりさん

こまどりきつと なやのなか

じぶんでじぶんを あっためる

あたまをはねに つっこんで

かわいそうな こまどりさん」⁹¹⁾

ここで、この童謡を通して2点ほどロビンにまつわる俗説について補足説明をしておきたい。その①は「可哀そうなコマドリ (“poor robin”)」という語句である。これについて、鈴木一博氏は「この鳥は〈ピルピルルルル〉とかくピーヨーピルチチチ〉と鳴くが、その音調は何となく哀れっぱ(く)」、英国の伝承童謡では「く可哀そうなコマドリ〉と歌われるのが一般的なのである」⁹²⁾と述べている。その②は“*He'll sit ...*”から窺い知ることが出来るように、ロビンの性別は男性である。この点について同氏の解説は実に明快で分かり易い。

俗説ではミソサザイとコマドリが^{つがい}番であると言うのである。これは、コマドリもまたミソサザイと同じように雌雄同色同大であることから起こったことである。これらの鳥はどちらも繁殖期以外は一羽ずつで行動し、秋冬の季節にはともに人家の近くに出没する習慣を持っている。こうしたことから、昔の人々は「ミソサザイは雌ばかりでコマドリは雄ばかりであ

る」, と考えたのであった。伝説では、ミソサザイもコマドリもともに埋葬されていない屍体を木の葉で掩い隠すと言われているが、これは両者が番であるという俗説によって、両者が同じ伝説を持つことになってしまったものと考えられる。⁹³⁾

と見てくれば、既に見たジョン・ウェブスターの『白魔』の詩句：「(ロビンとミソサザイは) 友もなく埋葬されない亡骸を葉や花で埋めてやる」で、主語としてロビンとミソサザイが並置されているのも合点がゆく。

10

では次に、『マザー・グース』の‘Who killed Cock Robin?’ (‘The Death and Burial of Cock Robin’) の原文と北原白秋訳を見てみよう。

“Who killed Cock Robin?”

“I”, said the sparrow,

“With my bow and arrow,

I killed Cock Robin.”

“Who saw him die?”

“I”, said the fly,

“With my little eye,

I saw him die.”

“Who caught his blood?”

“I”, said the fish,

“With my little dish,

I caught his blood.”

“Who’ll make his shroud?”

“I”, said the beetle,

“With my thread and needle,
I’ll make his shroud.”

“Who’ll be the clerk ?”

“I”, said the lark,
“If it’s not in the dark,
I’ll be the clerk.”

“Who’ll be the chief mourner ?”

“I”, said the dove,
“I mourn for my love,
I’ll be chief mourner.”

“Who’ll dig his grave ?”

“I”, said the owl,
“With my little trowel,
I’ll dig his grave.”

“Who’ll be the parson ?”

“I”, said the rook,
“With my little book,
I’ll be the Parson.”

“Who’ll toll the bell ?”

“I”, said the Bull,
“Because I can pull,
I’ll pull the bell.”

All the birds in the air
Fell a-sighing and a-sobbing,
When they heard the bell toll
For poor Cock Robin.⁹⁴⁾

「だァれがころした、こまどりのおすを」
「そォれはわたしよ」すずめがこういった。
「わたしの弓で、わたしの矢羽^{やば}で、
わたしがころした、こまどりのおすを」

「だァれがみつけた、しんだのをみつけた」
「そォれはわたしよ」あおばえがそういった。
「わたしの眼々^{めめ}で、ちいさな眼々で、
わたしがみつけた、その死骸^{しがい}みつけた」

「だァれがとったぞ、その血をとったぞ」
「そォれはわたしよ」魚^{さかな}がそういった。
「わたしの皿に、ちいさな皿に、
わたしがとったよ、その血をとったよ」

「だァれがつくる、経帷子^{きょうかたびら}をつくる」
「そォれはわたしよ」かぶとむしがそういった。
「わたしの糸で、わたしの針で、
わたしがつくる、経帷子をつくる」

「だァれがしるす、戒名をしるす」
「そォれはわたしよ」ひばりがそういった。
「あかるいならば、くれないならば、
わたしがしるそ、戒名^{かいみょう}をしるそ」

「だァれがたつか、お葬式^{ともらい}にたつか」
「そォれはわたしよ」おはとがそういった。

「^{ともら}葬ってやろよ，かわいそなものを，
わたしがたとうよ，お葬式にたとうよ」

「だァれがほるか，お墓の穴を」
「そォれはわたしよ」ふくろがそういった。
「わたしの^{こて}鍔で，ちいさな鍔で，
わたしがほろよ，お墓の穴を」

「だァれがなるぞ，お^{ほう}坊さんになるぞ」
「そォれはわたしよ」白^{しら}嘴^{はし}がさすがそういった。
「^{きょうほん}経本もって，小^こ本^{ほん}もって，
わたしがなるぞ，お坊さんになるぞ」

「だァれがならす，お鐘をならす」
「そォれはわたしよ」おうしがこういった。
「わたしはひける，力がござる，
わたしがならそ，お鐘をならそ」

^{そうら}空の上からみんなの小鳥が，
ためいきついたりすすりなきしたり，
みんなみんなきいた，なりだす鐘を，
かわいそなこまどりのお葬式^{ともらい}の鐘を⁹⁵⁾。

ここで，上記とは別版の原文と，その日本語訳を参考までに見てみよう。

Who killed Cock Robin ?
I, said the Sparrow,

With my bow and arrow,
I killed Cock Robin.

Who saw him die ?
I, said the Fly,
With my little eye,
I saw him die.

Who caught his blood ?
I, said the Fish,
With my little dish,
I caught his blood.

Who'll make his shroud ?
I, said the Beetle,
With my thread and needle,
I'll make his shroud.

Who'll dig his grave ?
I, said the Owl,
With my pick and shovel,
I'll dig his grave.

Who'll be the parson ?
I, said the Rook,
With my little book,
I'll be the parson.

Who'll be the clerk ?
I, said the Lark,
If it's not in the dark,
I'll be the clerk.

Who'll carry the link ?

I, said the Linnet,
I'll fetch it in a minute,
I'll carry the link.

Who'll be chief mourner ?

I, said the Dove,
I mourn for my love,
I'll be chief mourner.

Who'll carry the coffin ?

I, said the Kite.
If it's not through the night,
I'll carry the coffin.

Who'll bear the pall ?

We, said the Wren,
Both the cock and the hen,
We'll bear the pall.

Who'll sing a psalm ?

I, said the Thrush.
As she sat on a bush,
I'll sing a psalm.

Who'll toll the bell ?

I, said the Bull,
Because I can pull,
I'll toll the bell.

All the birds of the air
Fell a-sighing and a-sobbing,

When they heard the bell toll

For poor Cock Robin.⁹⁶⁾

「だれがこまどり ころしたの？」

わたし とすずめがいました

わたしのゆみやで

わたしがころした

だれがこまどり しぬのをみたの？

わたし とはえがいました

わたしがこのめで

しぬのをみた

だれがそのちを うけたのか？

わたし とさかながいました

ちいさなおさらで

わたしがうけた

だれがきょうかたびらを つくるのさ？

わたし とかぶとむしがいました

はりといととで

わたしがつくる

だれがおはかを ほるのだろう？

わたし とふくろうがいました

すきとシャベルで

わたしがほろう

だれがぼくしに なるのかね？
 わたし とからすがいいました
 せいしょをもってる
 わたしがなろう

だれがおつきを してくれる？
 わたし とひばりがいいました
 まっくらやみでなかったら
 わたしがおつきに なりましょう

だれがたいまつ もつのかな？
 わたし とべにすずめがいいました
 おやすいごようだ
 わたしがもとう

だれがおくやみ うけるのか？
 わたし とはとがいいました
 あいゆえふかい このなげき
 わたしがおくやみ うけましょう

だれがおかんの はこぶだろう？
 わたし ととんびがいいました
 もしもよみちでないのなら
 わたしがおかんの はこびます

だれがおおいを ささげもつ？
 ぼくら といったはみそさざい

ふうふふたりで
もちましよう

だれがさんびか うたうのか？
わたし とつぐみがいいました
こえだのうえから いいました
わたしがさんびか うたいます

だれがかねを つくのかね？
わたし とおうしがいいました
なぜならわたしは ちからもち
わたしがかねを ついてやる

かわいそうな こまどりのため
なりわたるかねを きいたとき
そらのことりは いちわのこらず
ためいきついて すすりないた」⁹⁷⁾

この「コック・ロビンの唄」は、「ハンプティ・ダンプティの唄（‘Humpty Dumpty sat on a wall’）」と並んで「非常によく使われるマザー・グース」^[98]の一つであり、「マザー・グース・ミステリー」ものとしても有名である。その主な作品として *Murder Must Advertise* (1933) by Dorothy L. Sayers, *The Nursing Home Murder* (1935) by Ngaio Marsh, *There Was an Old Woman* (1943) by Ellery Queen, *Bare Trap* (1952) by Frank Kane, *Test Kill* (1976) by Ted Dexter and Clifford Makins 等々が挙げられる。なかでも、S. S. バン・ダイン (Van Dine [1888–1939]) の『僧正殺人事件 (*The Bishop Murder Case*)』(1929) が「マザー・グース・ミステリーの最高傑作」^[99]と言われている。物語の内容は「引

退した物理学者のバートランド・ディラード教授の屋敷と、その付近で起きる連続殺人事件を扱ったもの」で、「それぞれの殺人がマザー・グースの唄の詩句に合わせるかのように行われていて、惨劇をいっそう怪奇なものに仕立ててい（る）」¹⁰⁰⁾と藤野紀男氏は言う。

ともあれ、「コック・ロビンの唄」にまつわるミステリーものを読む際に押さえておきたいのは、《Cock Robin＝被害者, Sparrow＝殺人犯, Fly＝目撃者》という基礎知識である。一例を挙げれば、“Who saw him die?” / “I, said the Fly.” の“Fly”のごとくである。これは、「コック・ロビンの唄」の第2番を踏まえているのは言うまでもあるまい。ちなみに、このスズメの悪役扱いについて、荒俣宏氏は次のように解説する：「スズメは個体数が多く、穀物やサクランボなどを食う害鳥という面をも有するので、ときには悪魔の手先と認められ、英国の童謡《だれが殺したか、コック・ロビン》でも弓と矢でロビンを殺す犯人にされている」¹⁰¹⁾

11

では第5に、英国絵画に登場するロビンについて見てみよう。その絵画とはラファエル前派の画家、ジョン・エヴァレット・ミレー（John Everett Millais [1829-96]）の『オフィーリア』（1852）である。オフィーリアとは「イギリスの劇作家シェイクスピアの悲劇『ハムレット』（1602 ころ初演）の登場人物。内大臣である父の命令で王子ハムレットの求愛を退けたあと、彼からじゃけんな仕打ちを受け、父の横死も重なって錯乱に陥り、小川で水死する」¹⁰²⁾ 悲劇の女性である。この哀れな娘をモチーフとして描かれた絵画が本邦でも有名な上記の『オフィーリア』である。

この絵に関して、ある評者は「画面をくまなく埋める細密な描写は、一種独特な空間を生み出し、さまざまな草花に飾られて水面に浮かぶ美しい少女の死を一層神秘的なものとしている」¹⁰³⁾と、また別の評者は「(数あるオフィーリアの絵の中で) ミレーの作品がとくに強烈な印象を与えるのは、オフィーリア

がく川面をただよいながら、祈りの唄を口ずさんでいたという、死の迫るのも知らぬげに〉(福田恆存訳)という情景を、映画的リアリズムで表現したことによる……現実的対象を克明に描きながら、しばしばそこに象徴的意味を託す」¹⁰⁴⁾と述べている。

なるほど、批評家たちの言うように、ミレーの『オフィーリア』は「対象を克明に描き」,「(細密な描写で)画面をくまなく埋め」ている。これは一見して明白である。とはいえ、「画面をくまなく埋める細密な描写」に「象徴的意味」が託されているとするなら、この絵の中にそっと——それこそ目を皿のようにしないと気付かぬほど——小さく描き込まれているロビンにすらも「象徴的意味」が託されているのは自明である。思うに、その一つは『マザー・グース』の‘Who killed Cock Robin?’から連想される「誰がオフィーリアを殺したのか?」という作者の内に秘めた怒りと告発であり、今一つはロビンの持つ「不思議な力」、受難で「死んだ人を見送る力」に由来する葬送の儀、宗教的救済の祈願を意味するのではなかろうか。

12

最後に、Robinsonを含め、ロビンにまつわる人名について見てみたい。言うまでもなく「RobinsonはRobinの息子の意であるが、RobinはRobertのpet-name」¹⁰⁵⁾でもある。木村正史氏の『英米人の姓名：由来と歴史的背景』によれば、Robinsonという姓は「イギリスにおける姓の上位20傑」の内の14番目¹⁰⁶⁾、また「アメリカにおける上位1,000姓一覧表」では22番目¹⁰⁷⁾と、かなり上位にあることが分かる。ロビンにまつわる人名で誰しも思い付くのは、英文学に登場する有名な人物で、世界中の子供たちに人気のあるChristopher Robin, Robin Hood, Robinson Crusoeではなかろうか。

最初のChristopher Robinは、ミルン(Alan Alexander Milne [1882–1956])が幼い息子のために書いた『クマのプーさん(Winnie-the-Pooh) [1926]』や、『プー横丁に建った家(The House at Pooh Corner) [1928]』に登場する男の子

の名前である。このファンタジーは、「20世紀で最も成功した童話の一つ」¹⁰⁸⁾と言われている。後の二人の人物については今更言うまでもあるまい。ちなみに、ロビン・フッドとロビンソン・クルーソーについて、平凡社の『世界百科事典』は次のように述べている。

ロビン・フッド

イギリスの伝説的英雄。〈獅子心王〉リチャード1世（在位 1189—99）の時代、すなわち 12 世紀後半ごろに、ノッティンガムシャーのシャーウッドの森にこもり活躍したと伝えられる。リトル・ジョン、タック坊さんなど、愉快な部下とともに悪王の圧政に苦しむ民衆を助け、金持ちから奪った富を貧民に与え、けっして女に害を加えぬ義賊といわれる……ロビン・フッドは民衆の間に圧倒的な人気があったため、数々の文献に名を残している。長編詩《農夫ピアーズの夢》（1360 年代から 90 年代）の中にすでにその名が現れるし、15 世紀の多くのバラッドに歌われている。15 世紀ごろからイギリス民衆の間に流行した舞踊〈モリス・ダンス〉では、踊り手がロビン・フッドや部下に扮する習慣があり、とくに〈メーデー〉（五月祭、5 月 1 日）は〈ロビン・フッドの日〉と呼ばれ、祝祭行事の一つとして彼に扮して踊って芝居をする……19 世紀のウォルター・スコットの代表作《アイバンホー》（1820）でも、リチャード1世を助ける正義の士としてロビン・フッドが登場する。現在でも映画やアニメ、絵本や漫画で活躍している¹⁰⁹⁾。

ロビンソン・クルーソー

イギリスの小説家 D. デフォーの小説。1719 年刊。正式タイトル《ロビンソン・クルーソーの生涯と奇しくも驚くべき冒険（*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*）》。その写実的手法のゆえに近代イギリス小説の原点と評される。17～18 世紀に流行した多くの航

海記や、チリ沖のフアン・フェルナンデス諸島に漂着し、5年間孤島生活を送ったというアレクサンダー・セルカークなる人物の実話に刺激されて作られた。商人の息子ロビンソンは父の忠告に反して船員となり、さまざまな苦勞ののち、無人島に漂着、28年間、最初は一人で、のちには従僕フライデーとともに自給自足の生活を送り、最後には救出されて帰国する。この作品の成功によって、同年続編も出版された。

この物語は単なる冒険小説ではなく、宗教的寓意があることも重要である。つまり、父に背いて罪を犯した人間が罰せられ、苦しみ、悔い改め、最後に救われるという当時のピューリタンの伝統にそった〈霊的自伝〉でもある。また、限られた物資のなかで生活を築いていくロビンソンの姿は、後世マルクスやウェーバーらの考察するところともなった。たとえばウェーバーは、ロビンソンの現実的・合理的行動様式に〈資本主義の精神〉に照応する目的合理的思考を読みとっている。《ロビンソン・クルーソー》はイギリスだけでなく広く読まれており、この物語をまねた漂流記も多く作られた。ドイツ語には〈ロビンソン・クルーソーもの〉を意味する〈ロビンゾナーデ Robinsonade〉という言葉も生まれ、フランス語の俗語〈ロバンソン robinson〉はロビンソンが用いていたような大型こうもり傘を意味する。日本では早くも幕末にオランダ語訳からの重訳が出版されたが、原文からの翻訳としては井上勤《絶世奇談 魯敏遜（ロビンソン）漂流記》（1883）が初期のものとしては注目に値する¹¹⁰⁾。

一読して自明のごとく、ロビンにまつわる英国の人物は、本家本元の「国鳥＝ロビン」と同様、民衆の間でも「圧倒的な人気（者）」である。誠に英国では、ロビンは何処から見ても愛すべき国民的アイドルであると言えよう。

胸赤鳥のロビンを「国を象徴する鳥」として特別視し、遇してきた英国。その植民地として出発し、ただ胸の赤い鳥というだけで、別種の鳥を敢えて「ロビン」と呼んで、慈しんできたアメリカ。このことを改めて思い見る時、ロビ

ンのアイドル的人気は、生物分類学上の違いはどうであれ、アメリカとて英国と同様である。それは、①「アメリカ合衆国ではもうともも親しまれている鳥の一つ」,¹¹¹「もうとももふつうに見かける鳥、アメリカ人がももも親しみをも持っている鳥」という言葉が示すように、ロビンにまつわる形容詞は最高級のオンパレードであることや、②有名な漫画の主人公、Batman の相棒（少年）がロビンという名前であることを見ても、自ずと明らかである。

たとえ特産のハクトウワシ（白頭鷲）¹¹¹に国鳥の座を奪われているにせよ、ロビンは昔も今もアメリカでは人気度ナンバーワンの鳥である。思うに、モーリス・メーテルリンク（Maurice Maeterlinck [1862–1947]）の『青い鳥』（1909）はく幸福は手の届くところにある。それは他人を幸福にすることだ¹¹²という教訓を与えるものであるが、少なくとも英・米の両国では「幸福の鳥」は常に身近に居る「胸の赤い鳥」なのではなかろうか。エミリー・ディキンソンの詩句：「弱った一羽のコマドリを／もとの巣へ戻してやれたなら ——／わたしの一生はむだにならないでしょう」は、その何よりの証左と言えよう。

最後に、ハクトウワシがアメリカ合衆国の象徴、紋章に選ばれたことを慨嘆する二人の高名なアメリカ人：鳥類研究家オーデュボン（John James Audubon [1785–1851]）とベンジャミン・フランクリン（1706–90）の言葉を紹介して本論を終えたい。

この鳥がわが国の紋章に選ばれてしまったことを私がどれほど深く悲しんでいることか。我らが偉大なるベンジャミン・フランクリンのこの問題に関する意見には、私もまったく同感なので、ここで紹介しよう。

「私が思うに、ハクトウワシをわが国の象徴として選ぶべきではなかった。あれは道徳をわきまえぬ性格の持ち主だ。正直な生活すらしない。自分で魚を獲るにはものぐさすぎる。このワシが何かの枯木にとまったのをきみも見たことがあるだろう。ミサゴがせっせと働いてやっと捕まえた魚を、連れあいやひなを養うために巣に持って帰ろうとすると、ワシは追い

かけまわして魚を取りあげてしまう。このような不正行為にもかかわらず、ハクトウワシの暮らし向きは決して楽ではない。人間のなかでペテンやかっぱらいで生活するやから同様、大方は貧しく、しばしばひどく不潔だ。そのうえ、とんでもない臆病者でもある。スズメほどに小さく非力なキングバードが勇敢に攻撃すれば、彼らはその地域から追い出されてしまう。このようなしでいで、この鳥は勇ましく正直なアメリカの紋章にふさわしいとはとても言えない。フランス人が『勤勉なナイト』とおだてる山師の象徴ならびつたりだろうが。』¹¹³⁾

* 高速道路を利用して土佐路から伊予路に向かうと、松林に囲まれた国境に「愛媛県 県木：松、県花：ミカン、県鳥：コマドリ」と大書した、色鮮やかな絵文字の標識がある。本章は、松山に向かう度に、この三つの絵文字に触発され、深い思いの中で書き上げたものである。というのも、夢に見たコマドリと遭遇し、その美声に酔いしれたのは愛媛の地であり、「松」は勤務先の松山大学とまた希代の鳥好きであった亡父：松静に、「ミカン」は父母の眠る追憶の地、古里の紀州にも繋がるものであったからである。これでやっと懸案の事項にけりを付け、菩提の地、愛媛との縁を新たにすることが出来た。これもひとえに松山大学のお陰である。深く感謝したい。また、本章で用いた洋書の中で、筆者の身近に邦訳のあるものは出来る限り利用させて頂いた。訳者の方々には深く感謝の意を表したい。

註

- 1) 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』75号（朝日新聞社、1972）、p. 5.
- 2) David Alderton, *The Complete Books of Birds* (Hermes House, 2002), p. 125.
- 3) 『野外観察図鑑5：鳥』（旺文社、1996）、p. 199.
- 4) 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』75号、p. 5.
- 5) 同上
- 6) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学——日・英・米の文学にあらわれる鳥——』（大修館書店、1982）、p. 2.
- 7) 日本鳥類保護連盟監修『野鳥の歳時記 別巻1：世界の鳥 ユーラシア／アフリカ』（小学館、1985）、p. 153. Cf. 井上義昌『英米風物資料辞典』（開拓社、1972）、p. 676：「アメリカの Kennedy-Nixon の大統領選を思わせるほどの激しい……いや、イギリス人にとっては、それ以上に重要な……選挙の結果、1960年12月7日‘robin’がイギリスの national bird に選ばれた」；中川芳太郎『英文学風物誌』（研究社、1957）、p. 332：「1749年創立の

- Bow Street Police Office 専属の Bow Street Runner は彼等の着用する赤チョッキから Robin Redbreast と綽名せられ、中々に敏捷で大胆な刑事巡査であった」。
- 8) 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』76号, p. 14.
 - 9) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学——日・英・米の文学にあらわれる鳥——』, p. 106.
 - 10) リチャード・アダムズ『四季の自然』岡部牧夫訳（評論社, 1978）, p. 8.
 - 11) 吉田金彦編著『語源辞典：動物編』（東京堂出版, 2001）, p. 108.
 - 12) William Henry Hudson, *Birds in London*（Longmans, Green, and co. 1898）, pp. 124-125.
 - 13) 井上義昌『英米風物資料辞典』, p. 676.
 - 14) *Birds of Field and Forest*, illustrated by E. Demartini and introduced by O. Štěpánek（Spring Books, 1965）, p. 120.
 - 15) 出口保夫／出口雄大『イギリス四季歴（秋冬）』（東京書籍, 1989）, p. 88.
 - 16) 荒俣宏「ロビン」, 『世界大百科事典』（日立デジタル平凡社, CD-ROM 版, 1998）。以下『世界大百科事典』からの引用は全てこの版による。
 - 17) 同上
 - 18) 「留鳥」, 『広辞苑（第5版）』（岩波書店, CD-ROM 版, 1998）。
 - 19) *British Poetry and Prose: A Book of Readings*, Edited by Paul R. Lieder, Robert M. Lovett and Robert K. Root（Houghton Mifflin, 1928）, p. 95.
 - 20) アイザック・ウォルトン『[完訳] 釣魚大全 I』飯田操訳（平凡社, 1997）, p. 33.
 - 21) Izaak Walton, *The Compleat Angler*（Everyman's Library, 1964）, p. 33.
 - 22) ギルバート・ホワイト『セルボーンの博物誌（下巻）』寿岳文章訳（岩波文庫, 1977）, p. 8.
 - 23) Gilbert White, *The Natural History of Selbourne*（Arrowsmith, 1924）, p. 107.
 - 24) 日本鳥類保護連盟監修『野鳥の歳時記 別巻2：世界の鳥 アメリカ／オセアニア』（小学館, 1985）, p. 142.
 - 25) 竹下信雄「コマツグミ」, 『世界大百科事典』。
 - 26) Chandler S. Robbins, Bertel Bruun, and Herbert S. Zim, *A Guide to Field Identification: Birds of North America*（Golden Press, 1966）, p. 230. Cf. David Alderton, *The Complete Books of Birds*, p. 125: "...chestnut-reddish plumage on the breast and upper abdomen."
 - 27) 竹下信雄「コマツグミ」, 『世界大百科事典』参照。
 - 28) 『英語歳時記（春）』（研究社, 1970）, p. 158.
 - 29) 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』76号, p. 14.
 - 30) 樋口広芳「コマドリ」, 『世界大百科事典』。
 - 31) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』（成美堂出版, 2005）, p. 88.
 - 32) 『野外観察図鑑 5：鳥』, p. 190.

- 33) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』, p. 88.
- 34) 平井照敏編『新歳時記（春）』（河出文庫，1989），p. 245.
- 35) 柿沢亮三「キジ」, 『世界大百科事典』。
- 36) ピーター・グッドフェロー『シェイクスピアの鳥』井上れい子訳（成美堂，1995），p. 62.
- 37) 同上
- 38) E. C. ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』加島祥造主幹，鮎沢乗光編集，鮎沢乗光・伊藤泰雄・岡田岑雄・小澤喬・内藤純郎・並木慎一・水協準・宮本三恵子・吉田尚子共訳（大修館書店，1989），p. 1489.
- 39) *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, Seventeenth edition by John Ayto（Weidenfeld & Nicolson, 2007）, p. 1176.
- 40) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*（North-Holland Publishing Company, 1984）, p. 388.
- 41) E. C. ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』, p. 1489.
- 42) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, p. 389.
- 43) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹，荒このみ・上坪正徳・川口紘明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛共訳（大修館書店，1984），p. 529.
- 44) *The White Devil* by John Webster（Project Gutenberg, 2004）の電子テキストによる。
- 45) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』黒田晶子訳（講談社，1977），p. 223.
- 46) William Henry Hudson, *Adventures among Birds*（J. M. Dent & Sons, 1951）, p. 188.
- 47) E. C. ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』, p. 1489.
- 48) *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, p. 1176.
- 49) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』, p. 529.
- 50) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, p. 388.
- 51) 日本民話の会・外国民話研究会編訳『世界の鳥の民話』（三弥井書店，2004），p. 44.
- 52) 同上，p. 43.
- 53) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』, p. 529.
- 54) 同上；cf. ピーター・グッドフェロー『シェイクスピアの鳥』, p. 62：「昔からコマドリには死んだ人々を見送る力が備わっていると伝えられていました。これは，コマドリを傷つけたり殺したりした人には必ず不運がやってくるという迷信と結び付けられた考えなのです」。
- 55) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, p. 389.
- 56) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』, p. 285.
- 57) William Henry Hudson, *Adventures among Birds*, p. 242.
- 58) 加藤憲市『英文学動物ばなし』（松柏社，1964），pp. 135-136.
- 59) 『シェイクスピア大全 CD-ROM 版』（新潮社，2003）。以下シェイクスピアの原文及び

日本語訳の引用は全てこの版による。

- 60) 小田島雄志訳
- 61) 小田島雄志訳
- 62) 樋口広芳『鳥たちの生態学』（朝日新聞社, 1987）, p. 94.
- 63) 樋口広芳「さえずり」, 『世界大百科事典』。
- 64) 日本鳥類保護連盟監修『野鳥の歳時記 別巻1：世界の鳥 ユーラシア／アフリカ』, p. 6.
- 65) 『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』75号, pp. 3-9.
- 66) *Wordsworth's Poems*, vol. 1, Edited with an Introduction by Philip Wayne, M. A. (Everyman's Library, 1955), pp. 159-160.
- 67) George B. Woods, gen. ed., *The Literature of England: An Anthology and A History*, revised edition, vol. 1. (Scott, Foresman and Company, 1941), p. 419.
- 68) 中村為治訳『叙情英詩集』（研究社, 1927）, pp. 26-27.
- 69) *The Poetical Works of Robert Herrick*, Edited by F. W. Moorman (Oxford University Press, 1921), p. 19.
- 70) 川和高斌『英鳥詩選』（泰文堂, 1971）, pp. 69-70.
- 71) 同上, p. 69.
- 72) 同上, pp. 71-72.
- 73) *Poems by William Blake*, selected with an introduction by Alice Meynell (Kessinger Publishing, 2008), p. 76.
- 74) 寿岳文章訳『ブレイク詩集』（弥生書房, 1974）, p. 40.
- 75) *British Poetry and Prose: A Book of Readings*, pp. 843-844.
- 76) 中村為治訳『叙情英詩集』, pp. 292-293.
- 77) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学——日・英・米の文学にあられる鳥——』, p. 106.
- 78) Walt Whitman, *Leaves of Grass* (Book Jungle, 2008), p. 358.
- 79) *Poems by Emily Dickinson* (Wikisource, 2008). 以下ディキンソンの英詩の引用は全てこの電子テキストによる。
- 80) 亀井俊介編『対訳 ディキンソン詩集：アメリカ詩人選(3)』（岩波文庫, 1998）, pp. 54-55.
- 81) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学——日・英・米の文学にあられる鳥——』, p. 108.
- 82) 同上
- 83) 河野一郎『英語の詩』（岩波ジュニア新書, 1993）, p. 123.
- 84) C. S. ルイス『ライオンと魔女』瀬田貞二訳（岩波書店, 2006）, p. 88.
- 85) C. S. Lewis, *The Lion, the Witch and the Wardrobe* (Penguin Books, 1964), p. 58.

- 86) C. S. ルイス『ライオンと魔女』, p. 90.
- 87) C. S. Lewis, *The Lion, the Witch and the Wardrobe*, p. 59.
- 88) 益田朋幸『ピーターラビットの謎：キリスト教図像学への招待』（東京書籍, 1997）, p. 54.
- 89) 同上, p. 55.
- 90) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, Edited by Iona and Peter OPIE (Oxford University Press, 1997), p. 513.
- 91) 谷川俊太郎訳・和田誠絵・平野敬一監修『マザー・グース①』（講談社文庫, 1981）, p. 124.
- 92) 鈴木一博『マザー・グースの誕生』（教養文庫, 1989）, pp. 146-147.
- 93) 同上, pp. 173-174.
- 94) 北原白秋訳『まざあ・ぐうす』（角川文庫, 1984）, pp. 3-5.
- 95) 同上, pp. 32-35.
- 96) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, pp. 151-152.
- 97) 谷川俊太郎訳・和田誠絵・平野敬一監修『マザー・グース④』（講談社文庫, 1981）, pp. 23-28.
- 98) 藤野紀男『知っておきたいマザー・グース part I』（三友社出版, 1983）, pp. 23-76.
- 99) 藤野紀男『〈グリム童話より怖い〉マザーグースって残酷』（二見文庫, 1999）, p. 149.
- 100) 同上
- 101) 荒俣宏「スズメ」, 『世界大百科事典』。
- 102) 笹山隆「オフィーリア」, 同上。
- 103) 『週刊朝日百科 世界の美術』16号（朝日新聞社, 1978）, p. 6 の 145.
- 104) 高橋裕子『イギリス美術』（岩波新書, 1998）, pp. 132-133.
- 105) 木村正史『英米人の姓名：由来と歴史的背景』（鷹書房, 1980）, p. 31.
- 106) 同上
- 107) 同上, p. 283.
- 108) 出淵博「ミルン, A. A.」, 『世界大百科事典』。
- 109) 小池滋「ロビン・フッド」, 同上。
- 110) 榎本太+山本泰男「ロビンソン・クルーソー」, 同上。
- 111) Cf. 樋口広芳「ハクトウワシ」, 同上：「国鳥を最初に定めたのはアメリカで, 1782年に特産のハクトウワシが議会により選定された。日本では1947年に日本鳥学会第81回例会でキジが選定された。その選定理由には, キジが日本特産であるだけでなく, 童話, 文学, 芸術などで親しまれ, 勇気と母性愛に富むという点などがあげられた」。
- 112) 松室三郎「メーテルリンク」, 同上。
- 113) スコット・R・サンダース編『オーデュボンの自然誌』（宝島社, 1995）, pp. 140-141.